WORK

| ワーク | https://www.work-wheels.co.jp
tel.06-6746-2859(西日本)
tel.048-688-7555(東日本)
tel.052-777-4512(中日本)

GNOSIS RXS
グノーシス アールエックスエス

22inch	8.5J～12.5J	15万7300円～22万4400円
21inch	7.5J～12.5J	12万4850円～19万6350円
20inch	8.0J～12.5J	11万円～16万9400円

2026年は“原点回帰”グノーシスRXが魅せる

まるで削り出しのようなシャープなスポーク。ディスク外周部はピアスレス仕様とし、傾斜面を作ることで躍動感UP。

GNOSIS RXM
スポーク側面はリブ形状にせず、ストレートに落とした潔い面構成。RXSと同様、ディスク外周の傾斜も特徴だ。

BACK LABEL ZEAST BSTX
ダーストSTXをフルリバースリムに仕立てたのがBSTX。STXより履きやすいインセットが増え、選択肢が拡大。

WORK EMOTION CR Shigoku
CR極を超えるべく、ワークの最新技術を駆使して誕生したCR至極。写真の「アームドチタン」カラーもNEW。

無駄を省き、洗練を重ねて原点のシンプルへと帰還

あくまでVIPスタイル的視点になるが、2025年のワークの主役は何といっても「VS KF#」だった。そして2026年はどうかといえば、「RXS」と「RXM」の2本を揃えて発表した、新シリーズ「グノーシスRX」の線が濃厚。

グノーシスは2009年のデビューから、いくつものヒット作を輩出してきた主力ブランドの一つ。メインターゲットは輸入車ながら、国産セダンからの支持率も非常に高い。シンプルに洗練されたデザインをベースに、モデルによってはコンケーブや鍛造などの注目要素を投入。2ピースメインでツライチにこだわれるのも人気の理由だろう。

さてグノーシスRXだが、基本コンセプトは原点回帰。無駄のない機能美を備え、流行よりも時代に左右されない普遍性に重きを置いたスタイリングになっている。ディスクはコンケーブではなく、フラットや軽めのラウンド基調として、ピアスボルトはナシ。雰囲気はブランド初期のHSシリーズに近く、原点回帰という言葉にも頷ける。

といっても古臭さはまったく感じない。RXSは従来のグノーシスにはなかった2×5のY字スポーク。大胆で力強く、スポーティさを強調したり、ブレーキを見せたい仕様に最適だろう。スポーク先端の下部をえぐり取るアンダーカットや、側面のエッジーなリブなど、ディテールもさり気なく凝っている。

RXMは王道のメッシュ。粗すぎず細かすぎない9交点レイアウトを採用。足の太さや長さ、Y字の角度、センターの形状など、驚くほどクセがない。安易に無難さを選んだのではなく、むしろ妥協なく最適化していった結果だと推測される。

筋肉質でスポーティなRXSと、究極シンプルなRXM。どちらも研ぎ澄まされた雰囲気を持ち、鋳造ながら鍛造モデルのような印象もあり、プレミアム化が進む現行世代のセダンにこそ、こうした真っ向勝負のホイールがハマりそうだ。

もちろん注目はこれだけではない。ジーストSTXのバックレーベルverや、シュヴァート・クヴェルを継承したクヴェルII、シュヴァート・ブルネンの1ピース版となるブルネンLX、エモーションCR至極といった新作が目白押し。即完売となったが、VS KF#限定色も！

「塗黒コーナー」も好評。ディスクはマット、リムはツヤありというツウ好みなコーデを披露した。

昨年のワークブースも凄かったが、今年も負けず大盛況。ホイールの新作・新色だけでなく、アパレル系も力が入っていた。

即完売！

VS-KF# Chrome Edition
初代KFを彷彿させる美的クロームエディション。18・19インチのみ600本限定発売だったが、すでに完売。

SCHWERT QUELL II
あのクヴェルが正統進化。鋳造の限界に挑んだシャープさは受け継ぎつつ、立体感や足長感をより高めた。

SCHWERT BRUNNEN LX
人気のメッシュ・ブルネンを1ピースに。スポークをリムまで伸ばし切り、マルチピースにはない大口径感を獲得。